

歌人探訪



自宅書齋にて（昭和二十八年ごろ）

この日ごろ桜ゆたかに咲きをりて風吹く
ときに幹あざやけし

桜を詠んだ歌は多い。しかし、こうした桜の歌に出会ったのは、はじめてであった。

高校を卒業して間もないころ、短歌などを作り合っていた友人にすすめられて求めた、一冊の瀟洒な歌集『長風』の、その巻頭にこの桜の歌があった。あの時の、背すじがぞくつとするような、或る種の衝撃的な感動は、四十年以上たった今も、なお忘れがたい。

「この日ごろ桜ゆたかに咲きをりて」と、ゆつたりと何気なく、平易に歌い出されてはいるのだが、そのトーンは下句に到って一転する。「風吹くときに幹あざやけし」——何という透徹した眼力であろうか。作者は風にあおられて揺れる満開の桜の花の奥に、瑞々しい輝きにみちた黒い幹が、ときおり貌を現わすのを、確かに見て取っているのだ。「あざやけし」は、その幹の表情と姿態がともに鮮明

鈴木幸輔

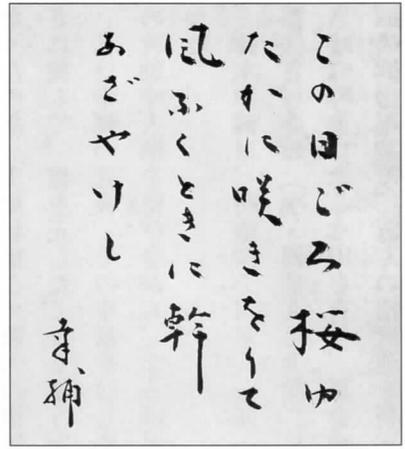
杜澤光一郎

であることを、表現に写したことばといえよう。その優れたリアリティには、凄みさえただよっている。それだけではない。この作品は、昭和二十一年の作であるが、一首の裏側には、戦後まもなくの社会と人間の姿までが、象徴的に透けて見えるような感じさえするのである。私がこの一首に出会った時に感じた「背すじがぞくつと」するような、或る種の衝撃的な感動」は、おそらくそうしたことに起因するものであったにちがいない。

晴れし日の永きゆふべに皆しろき椿の花
に黄の葢がみゆ

雨そそぐ時に形のあきらかに花ゆれてゐ
る白き椿は

木蓮は花ともどもに木肌さへ白くあかる
し永き日のくれ



自筆色紙

桜の歌にみられるその作者の透徹した眼力は、同じ歌集『長風』の中の、こうした木の花の歌にも及んでいる。その眼は、対象の中の「時間と空間」を見据える眼といつてもよいであろう。とどまることのない時の流れの中にあつて、桜や椿や木蓮が、空間的なものとして、どのような存在を主張しているか。その表情や姿態を発止と見据えて、作品として定着させようとする、鋭利なまでの作家の眼が、これらの作品には感じられる。その眼光はまた、次のような作品の上にも、同じように徹っているように思われる。

雨漏りが土間をえぐりて夜半すぎにをりをり魚の居るごとく鳴る

乱れやすきものと見れども蠟の火の焰が 円く澄めるをりふし

あをあをと露の流るる竹立てり篁はいま 音のなき時

汽車のゆく時に動きてふはふはとレール の浮くをわれは見てたつ

もちろん、『長風』という歌集が、こうした厳しい緊張感にみちた

作品ばかりでみだされていくわけではない。例えば、

病める子と歩みきたりてこころ寂し露し たたれる竹群のおと

縫ひながら衰へて墜落す妻みにくき時を 夜は子も見る

雨もりの水がえぐりて逃げゆきし土間の 穴より朝かげは差す

歌集の中には、こうした子供や妻や貧しさを歌った小市民としての生活詠や、涙ぐむような折々の感傷を素直に歌った、親しみやすい作品も多く収められている。

この歌集『長風』の作家鈴木幸輔が、まだ「コスモス」に所属していた頃、私もコスモス埼玉支部の先輩たちと一緒に、幾度か浦和のその自宅に押しかけたことがあった。「俺を先生などと呼ぶな」という命令に素直に従うようにして、先輩たちはこの歌人を「幸輔、幸輔」と呼びすてにしたり「幸輔さん」などと呼んだりしている光景は、はじめのうち

は異様でさえあったが、私も間もなく先輩たちと同じように「鈴木先生」などとは呼ばなくなっていた。つまりはそれほどに普段の鈴木幸輔は親しみやすく、優



浦和の自宅で妻トシと（昭和32年ごろ）

しく暖かかった。またトシ夫人をはじめ家族の方々も、皆明るく朗らかに屈託がなかった。

しかし、話が文学や短歌のことに及ぶや、幸輔の眼鏡の奥の眼は、人を射ぬくような輝きをおびてギロリと光った。「君たちが五首や十首書いたって、どうにもならん。」「半年やっても、ものにならなけりや、歌なんか止めた方がいい。」「そんな冷酷とも言える言葉を投げつけられた先輩もいたようである。しかし、低い声でつぶやくように発せられる、そうした冷徹な言葉に、宗匠ぶったひびきは、不思議になかった。それは幸輔がおのれ自身に向かつて投げつけているような、剣の修行者のつぶやきのような、重いひびきと、強靱な矜持を感じさせるひびきを伴っていた。そういえば『長風』の中には、次のような歌もあった。

一步を墮ちなば飢ゑるところにぞ居りたり生涯の莊嚴として

やはり鈴木幸輔という作家は、人よりはおのれ自身に厳しい作家だったのだ。実際私はこの歌人の清貧ともいべき生活ぶりにつぶさに接して、襟を正したくなるような思いを、幾度も味わった。

私は幸輔の死後、その年譜をはじめて読んだ時、生前のこの歌人の言動や人柄を偲びながら、なるほどと納得のいくことが幾つもあった。

鈴木幸輔は、明治四十四年（一九一一年）一月九日、秋田県仙北郡強首村寺館（現・西仙北町寺館）に生まれている。父孫四郎は、当時六町歩に余る水田を有し、郡会議員をつとめながら、雄物川流域の開田事業や、近くの沼沢地を利用した養鯉事業などを行ない、

村の為には財産を惜しまず使うような豪放な事業家であったという。母ノブは、秋田佐竹藩士吉成家の出としての誇りと、厳しい生き方を身につけた女性で、

秋田本荘中時代（昭和2年ごろ）



小学校の教師になったこともある知識人で、幸輔の美意識に最も強い影響力を持った人であつたらしい。その母親の教育上の考えもあつて、幸輔は小学校二年の時、寺館小学校から、母方の実家吉成家に預けられ、角館小学校に転校し、矜持高き祖父、吉成弥五郎に可愛がられ、その亡き後も、そうした士族気質の家風の中で育てられていったのだつた。

さらに年譜をたどると、次のようにある。

昭和三年（一九二八年）十七歳

本荘中学校を卒業。病弱のため家に籠るが、この頃よりひそかに上京を思う（早稲田大学に学ばんとする）

昭和六年（一九三二年）二十歳

咯血して上京を断念。療養をしながらひとり作歌をはじめめる。

俳句、詩も作る。

昭和九年（一九三四年）二十三歳

歌集『白南風』を読み、初めて白秋を知る。

昭和十年（一九三五年）二十四歳

六月「多磨」創刊と共に北原白秋に師事する。その十月号に載った「荒海」の連作は白秋の激賞を受ける。

船ゆくが高浪博てる四方にしてとどろく
音は天に響けり

黒潮のうねりを低く鶺鴒の鳥の飛びゆくと
暗し声啼かずけり

高浪の息づき休むたまゆらのこの寂けさ
を恐れむとはする

真日(まひ)の照り浪来て咆ゆる巨巖おほいはに海明不動
像を感覚する我は

いま、その「荒海」三十六首の中から、私なりに四首を抽出してみた。白秋の影響を濃厚に受けながらも、すでにこの作者らしい厳しい眼力と、表現の彫琢ちやうたくを見てとることができる。

「君たちが五首や十首書いたって、どうにもならん。」とか、「半年やつてもものにならなけりや、歌なんか止めた方がいい。」と、若い作者たちに言い放ち、叱咤しったした幸輔の心の中には、もしかすると、こうした自分の青年時代の、大作をねりあげていった、血のにじむような修練の日々が、よみがえっていたのかもしれない。また終生かわることのなかった強靱な精神力と作家魂のようなものは、武家の流れをひく者という、ひそかな矜持に支えられていたのかもしれない。

ともあれ、こうして「多磨」の注目すべき新人として、確固とした歩みを踏み出した幸輔は、昭和十二年、最愛の妻トシを迎えての結婚、昭和十三年の長男幸彦の誕生と、まさに順風満帆といった感じであった。しかし、翌十四年には、召集によって秋田歩兵第十七

幸輔

聯隊への入隊という、過酷な運命が待ちかまえていた。軍隊の方は病弱ということで、その年の十二月に除隊となったが、昭和十六年九月、幸輔は再度の咯血にみまわれ、勤めていた秋田商工会議所を退職し、自宅療養の日々をすごさねばならなくなる。そうした現実に追い撃ちをかけるようにして幸輔を襲ったのが、師白秋の逝去（昭和十七年十一月）と、生まれてまだ三歳にも満たなかった長女祥子の、脳炎による死であった（昭和二十年九月）。

戦後になって、ようやく健康をとりもどした幸輔は、昭和二十三年、赤貧の生活の中ながらも、第一歌集『谿たに』に、白秋に師事してから十年間にわたる作品五百九十余首を収めて世に問うた。その巻頭を飾ったのが、「荒海」であり、その巻末には、祥子の死を詠った群作「死児をおぶひて」七十首が据えられた。

死にし子のなきがら負ひて来しときに酸すっぱ
漿づきのごとき入目を見たり

仙台での「多磨」の歌会（昭和15年）。前列左から3人目白秋。後列右から4人目（眼鏡をかけている洋服の人）が幸輔。



死にし子のなきがらの香はわが身より匂ふことあり理由もなき

夜々の子の墓にきて火を焚けば太古に独りわれ居ることし

それはまさに凄絶とも言える歌人鈴木幸輔の、作家としての出発であった。

幸輔はその後、職を転々としながらも、同人誌「萬歴」を編集したり、みずから出版社古径社を営んだりもするが、なかなか軌道に乗れないままに、文学活動の拠点でもあった「多磨」の廃刊を迎えた。その後をうけて昭和二十八年に、宮柁二は結社誌「コスモス」を創刊主宰することとなったが、幸輔はその創刊に加わり、しばらくの間行動を共にする時期を持った。その縁もあって、幸輔は昭和四十三年に健康上の理由から退職するまで、日新運輸倉庫株式会社就職することも出来、ようやく生活上の安定を得ることとなった。先に触れた歌集『長風』は、昭和二十九年、第二歌集として刊行され、翌三十年には第一回日本歌人クラブ推薦歌集に選ばれている。

しかし、やはり自分の主宰する結社をもちたいという、やむにやまれぬ気持から、幸輔はコスモスを退会して、翌三十二年には長風短歌会を結成、「長風」という名の結社誌を創刊することとなった。幸輔四十六歳のことであった。

ともあれ白秋系結社の一主宰者として独立した幸輔は、「長風」を出しながら、毎年各地で全国大会などを開いては、その厳しい文学精神による指導と歌人の育成につとめていった。その間、幸輔は第三歌集『禽獸』(昭38)、第四歌集『幻影』(昭47)、第一歌集『谿』

の姉妹篇にあたる『みづうみ』(昭51)というふうじ、歌集を次々に世に問うていった。また昭和四十九年には、故郷である秋田の強首に、冒頭に触れたあの桜の歌を刻みつけた歌碑も建立されている。

晩年(昭和53年)



しかし、そうした内にも、宿痾となった心臓弁膜症の病魔は、幸輔の強靱な精神力をものりこえる勢いで、その肉体をむしばんでいたのだった。度重なる浮腫と呼吸困難の発作にみまわれていた幸輔の容態が、急変し、ただならぬ状態となり、救急車に乗せられて大宮日赤病院に入院したのは、昭和五十五年三月二十八日の事であった。しかし病状は悪化の一途をたどり、遂に四月一日午前零時四十五分、歌人鈴木幸輔は、その一生を閉じたのであった。享年六十九歳。

『幻影』以後に遺された約一千八百首の短歌は、その死後長風短歌会の編集委員と長男幸彦氏の手により、第六歌集『花酔』として、昭和五十六年九月、古径社から刊行された。

鈴木幸輔らしい眼力の働いた、しかも彫琢された表現力を感じさせる秀歌を、今まで触れなかった他の歌集の中から抽出してみよう。

牡丹落ちて真昼を深むものの怪の揺れ移るかにまたも崩るる

『みづうみ』

幾万のさくらの花の散るときに雀のこゑはしばしきこえず

走りたる孔雀が静止して立てりその黄鱗(きりりん)
の固く勁(つよ)き脚

冬山にする地ひびきの中心に滝ありて火
を噴くごとき音

白くしてまじるものなき一いろの砂の淋
しき照り明りつつ

たまゆらに失せて幻(まぼろし)なせるもの花さくご
とくありし渦潮

末期(まご)の眼見る色のごと赤はありうらがれ
て庭に残る花々

しづまりて今日のたかむらかぎりなく雪
降る音は葉むらにこもる

このような秀歌は、まだまだ枚挙にいとまがないほどだが、こ
うした透徹した眼力は自然のみならず、彼の身の生活の隅々にまで
及んでいたといつていい。それらを一一つ挙げる余裕はすでにな
いが、迫りくる死の予感の中で詠んだのであろう、鬼気をさえ感じ
させる最晩年の歌を紹介しておこう。

春曇る日に病めるあり死するありみづか
らの死を知らざるは死者

遊(あそ)びゐて音をたてざる大鯉(おと)老いたるも
のは静かにあらず

『禽獸』

『幻影』

『花酔』

『花酔』

あるときの部屋は檻にて老いしわれ右を
見、左を見、首をあげ、首を垂れ

わがからだ如何なるときにかかはるか四
肢の爪二十死者のむらさき

後頭部あつく鼻血のとどまらず彼岸に入
りて日々天の藍

幸輔はすでに臨終の床にあつても、詠草を書き記すための紙片を
手ばなさず、何ごとかを書こうとして、側にいる者に筆記用具をく
れというような仕事をくりかえしたという。けだし壮烈な歌人の死
であつた。

同じ埼玉に住み、よき理解者でもあつた歌人加藤克巳(かつみ)は、彼の死
を悼んで、次のような追悼文を地元の新聞に寄せている。

鈴木幸輔は歌に生き、歌に死んだ。世を渡るにつたなく、ただ
ひたすら歌一筋に生き来つた幸輔が、遂に四月一日零時四十五分、
その歌に死んだ。潔(いさぎよ)い死であつた。毅然たる死であつた。〈中略〉
彼は、歌に心血を注ぎ、時に、歌に痩せほそるまで清やかな挑
みを全うし、きびしく、澄み冴えた境地のうちに、その詩、その
歌に死んでいった。

鈴木幸輔の生涯は、かの長身瘦軀・孤高清廉な相貌が象徴する
ごとく美しかった、と人は長く語りつづけるにちがいない。

(埼玉新聞 昭55・4・8より)

(とざわ・こういちろう 「コスモス」 選者)